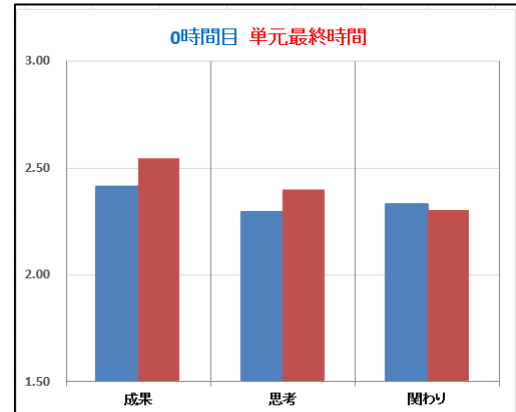
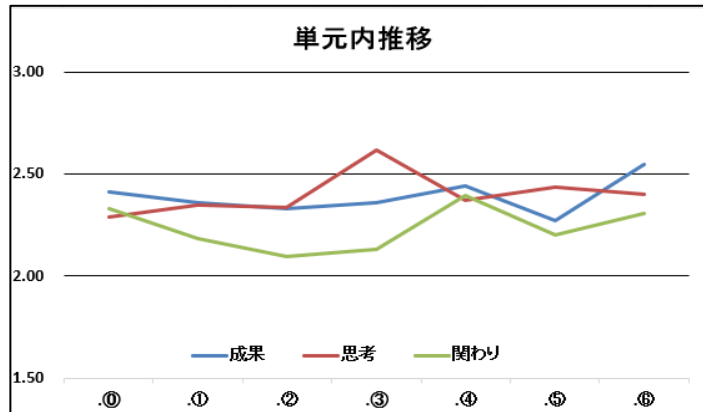


1 単元名 グーグーグーでかかえ込み跳び

(器械運動・跳び箱運動)

2 児童の変容

(1) 情意面 (形成的授業評価をもとにした授業評価から) 男子13名 女子15名 計28名



- ・「成果」は単元前よりも単元最終時間の数値が高くなった。6時間目の発表の時間では跳び箱を越えることができた児童が多く、達成感を得たと考えられる。単元の途中でも跳び箱に足が引っかけからなくなったり、跳び箱の高さを上げることができたりと成果を感じる場面が多くあったことがうかがえる。各時間の最後に全体の前で技を発表する時間があったことも数値が下がらなかった一つの要因であると考えられる。成果については技をたくさん練習するインプットの時間と全体の前で発表するアウトプットの時間のバランスが大切であると考えた。
- ・「思考」は単元前よりも単元最終時間の数値が高くなった。2時間目は技について、5時間目は課題解決について思考する時間だったので数値が少し高くなった。一方で最も数値が高くなった3時間目は技のポイントを押さえて、様々な場で練習する時間だった。技のポイントを知った上でたくさん練習することができた3時間目は、児童自身が練習をする中で自分に必要な動きや練習方法を考えられる時間になったことがうかがえる。思考については全体で押さえるべきポイントを思考する場面と児童自身が自分に合った内容を選択して思考する場面を取り入れると技に対しての思考が深まっていくと考えた。
- ・「関わり」は単元前よりも数値が低くなってしまった。自分に合った場を選択するために決まったグループを組まなかったことや児童同士の補助を取り入れなかったことは数値が低くなった一つの要因であると考えられる。しかし、練習中に互いに見合う場を設定した4時間目や互いの技を見合った6時間目の数値は少し高くなった。場の設定次第では児童同士の流動的な関わりを生み出せると考えられるので誰とも関われない雰囲気を作りながら学級全体での関わりを増やしていきたい。

(2) 技能面

	①またぎ越し (両足で踏み切る)			②開脚跳び (肩と腰が水平以上)		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	26	1	1	14	9	5
単元後	26	2	0	16	7	5
	③跳び上がり跳び下り (両足で跳び乗る) (肩と腰が水平以上)			④かかえ込み跳び (肩と腰が水平以上)		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	20	4	4	6	11	11
単元後	24	2	2	13	7	8

- ・単元前と比較して数値の上昇が見られる。運動量を確保するために単元全体を通して場の設定や学習の流れを大きく変えず、活動できる時間を増やせたことは一つの要因であると考えられる。また、継続し

て踏み切りの練習を行って高く跳べるようになってきたことも一要因として考えられる。

- ・単元全体を通して、技に積極的に取り組む雰囲気の中で練習できていたので、スモールステップ表などの資料やうさぎ跳びなどの練習方法の質を高めて児童に合ったものを準備できれば、もっと高い数値を得られたと考える。

(3) 思考面

問 かかえ込み跳びができるようになるために、どのような練習や取り組みが必要だと思いますか（しましたか）。（複数可）		
単元前		単元後
・高くジャンプする練習	1 4	・腰を高く上げる練習をした。 1 1
・踏み切りの練習	7	・踏み切って高く跳ぶ練習をした。 6
・足をかかえ込む練習	3	・踏み切りの練習をした。 6
・着地の練習	3	・うさぎ跳びで腰を高く上げる練習をした。 5
・低い段で練習	3	・足をかかえ込む練習をした。 4
・走って跳び乗る練習	3	・着地でしっかりと止まる練習をした。 4
・手を着く練習	3	・低い段から挑戦した。 4
・怖がらない	2	・自分に合った場所で練習した。 3
・助走の練習	2	・繰り返し練習をした。 3
・何回も挑戦する	2	・腕で突き放す練習をした。 2
・カエルの足打ち	1	・跳び上がり跳び下りの練習をした。 1
・開脚跳び	1	・友達にアドバイスをもらった。 1

- ・かかえ込み跳びの知識が定着し、技のポイントに関連する練習についての記述が増えた。児童が技のポイントを意識しながら練習できた成果であると考え。
- ・練習内容が具体的になったり、種類が増えたりした。かかえ込み跳びを実際に取り組んで、自分の課題解決のために必要なことを知り、意識することができたとうかがえる。

3 成果と課題

中学年のめざす姿

自分の課題を見付けたり、課題解決に取り組む内容を選んだりする中で、知識や考えたこと、気付いたことを伝え合うことができる児童

【成果】

- ・単元を通して体ならしの運動や踏み切りの練習を継続して行えたことは技能向上につながったと考えられる。児童も何をすればよいかわかった状態になり、どんどんと技に取り組む雰囲気が作られ、結果としてかかえ込み跳びに挑戦しやすい雰囲気となった。また、体ならしの運動がスモールステップの最初の方の運動になっていたので段階的に挑戦しやすくなったと考えられる。
- ・単元後半は知識が深まり、意見を伝え合う場が設定できていたので児童同士の関わりが増えてきていた。児童は場を移動しながら練習に取り組んでいたので様々な友達と考えを伝え合うことができていたと考えられる。
- ・単元前半から教師はポジティブな声掛けを行った。その結果、単元後半では「高く跳べるようになったね!」「腰が上がってるね!」などの声や「いいね!」「おいしい!」などのポジティブな声が聞こえるようになり、温かい雰囲気の中で練習ができていた。教師自身が児童にしてほしい関わり方をしていくことが児童同士の関わりへとつながっていくと考えられる。

【課題】

- ・児童が自分の課題を見付けるところまではできていたが、課題解決をする方法や自分が目指す姿を見付けることができていない児童がいた。スモールステップ表などの資料や場の設定が不十分であったと考えられる。資料についてはスモールステップ表を精査したり、課題解決のためのフローチャートを取り入れたりすることで児童が活用できるものを提示できるようにしていきたい。場の設定については児童と教師が関わる場面を増やし、児童の実態や考えを照らし合わせながら能動的に変化させていきたい。
- ・児童同士の関わりが少なくなった要因として児童同士の補助がなかったことが考えられる。今回のかかえ込み跳びで補助を取り入れるのが難しく、教師が補助する場面も少なくなってしまった。かかえ込み跳びのように児童同士の補助が難しい場合は、体ならしの他の運動で補助を取り入れるなどして児童の関わるの場面を増やすべきだと考える。